

かかわり合いながら学びを深め、自らを高める生徒の育成 ～新聞を活用する場面やアウトプットする場面を取り入れた授業を通して～

新潟市立五十嵐中学校

1 NIE実践のねらい

昨年度まで教職員一人一人が授業力を向上すること、特に新潟市の授業づくりをもとに、主体的・対話的で深い学びのある授業の実現に向けて授業改善に取り組んできた。授業力向上と学級の支持的風土づくりに取り組み、徐々に成果が見られている。しかし、多面的で多角的な思考・判断・表現の視点においてまだ十分とは言えない。そこで、今年度は、互いに批評し合う形での授業改善による授業力向上と意図的に仕組んだ学級・学校の支持的風土づくりに重点を置き、研究を推進している。特に授業改善のための研修については、指導と評価の一体化の実現を目指し、GIGAスクール構想実現のために ICT の活用を含めたアウトプットを重視した授業の在り方の研修を進めてきた。

また、令和6年度は、新潟県 NIE 実践指定校（2年目）となっており、より一層新聞を閲覧する環境を整え、新聞を通して世の中の出来事を把握する態度を養うこと、新聞を積極的に活用し、様々なものの見方・考え方を培うことが必要となってくる。そこで、研究推進委員会では、2つの力を養うため、国語・総合・学活と多様な教科で実施することを目指し、指導案検討や協議会の内容検討を行ってきた。新聞を活用する授業を通し、協働性が発揮でき、自分の考えをより深めることができる子どもたちが育まれるよう、研修に取り組んでいく。

2 本年度実践の概要

令和5年度は、新聞を閲覧できる環境が整備され、授業への活用も見られるようになった。令和6年度は、生徒がさらに新聞を身近に感じられるような環境づくりと、新聞を通じて様々なものの見方や考え方を培うための工夫を行った。図書館前の新聞コーナーの設置、図書委員会による新聞記事の紹介は前年度同様に引き続き行い、令和6年度は新たに次のような取組を行った。

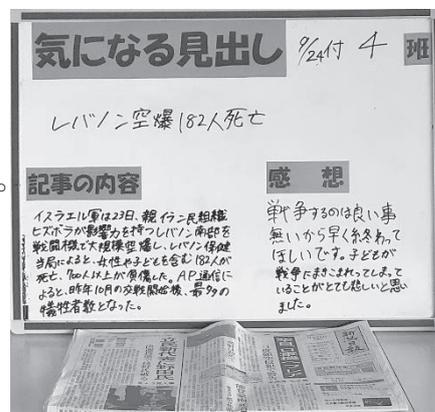
(1) 学級での新聞活用

毎日班ごとに気になる新聞記事を探し、感想と共にクラスメイトに紹介したり、日直が新聞記事を写真に撮り、クラスメイトに ICT 端末を使って送信し、感想を述べたりするなど、新聞を身近なものにする工夫が見られた。

また、学級だより等で新聞記事を紹介し、生徒の活動に役立てている学級もあった。

(2) 生徒に向けての講演会

新聞を書く力を高めるために、1年生を対象に「相手に伝える方法。文書にまとめる力」という演題で新潟日報の木村隆様より講演をしていただいた。新聞の記事の配列や記事を書くために何が大切かなどを詳しく学んだ。



【生徒 A さんの感想】

最も印象に残ったことは新聞を作るまでの大変さです。記事に間違いがないかの確認や編集など様々な工夫があってすごいなと思いました。新聞を作るときには、記者が取材をして記事を書くだけでなく、編集したり話し合ったりして1つの新聞が作られていることが分かりました。また、新聞を読むとき、今日教えていただいた逆三角形や5W1Hが使われているかを探したいと思いました。私が文書を書く時にも5W1Hを意識したり、大事なところを見出して書いたり、今日学んだことを生かしていきたいです。



(3) 校内研修

7月にNIEアドバイザーである新潟大学附属新潟中学校長の山本達也様をお招きし、研修を行った。研修では「なぜNIEに取り組むのか」「なぜ新聞活用が学習に有効なのか」をご講義していただいた。特に、新聞活用を闇雲に用いれば良いのではなく、その都度、ねらいや意図をもって用いることが大切になってくることを職員全員で確認した。その後、3年生社会科の公民分野「裁判所の仕組みと働き」で裁判員制度について模擬授業をしていただいた。学習課題を「日本において裁判員制度は、このまま継続できるだろうか。」として、日本の裁判員制度とアメリカの陪審制度を比較したり、新潟日報の裁判官の責任に関する記事を読んだりする活動を通して、学習を深めた。



(4) 学年道徳への新聞記事活用

1年生は、学年の道徳の時間に題材名「友達と良い関係を築くには」の中で、自分と周りの人では考え方や感じ方が違うことを知ったり、友達と良い関係を築くために自分が今後どのような言動をしていくかを考えたりする授業を行った。新聞活用の場面では、「互いの気持ち考えよう」朝日新聞（長州小力）や「いじめの詩」を読み、学級担任が熱く語る場面を設定した。生徒は新聞記事を読み、いじめについて深く考え、今後のクラスや来年度のクラスでお互いが気持ちよく過ごせるためにどのようなことに気を付けて過ごしていかなければならないかを真剣に考えた。

- ・「互いの気持ちを考えよう」朝日新聞 2006年12月8日掲載
- ・「いじめの詩」朝日中学生ウィークリー 2014年8月31日掲載

互いの気持ち考えよう

お笑い芸人・長州小力さん

友だちをからかったり、ふざけて悪口を言ったりすると、みんなが笑う。言われた本人も笑うことがある。

君はそれを、いじめとは思っていないかもしれませんが、言われた相手は深く傷つくことがあります。自分の態度（たいど）や言葉がどう伝わっているか、相手の気持ちを考えることは、とても大切です。

僕は笑いの仕事をしています。乱暴（らんぼう）な言葉づかいもします。大きな声も出します。悪口のやりとりで、笑いが起きることは、よくあります。

そういうとき、自分の言葉を相手はどう感じているのか、テレビを見ている人は、どう思っているのか、こうしたことが、いつも心配になります。僕自身、太っているとと言われると、いくら笑いが起きても、やっぱり嫌な気持ちになります。

僕が中学生のとき、となりの中学校で、いじめに苦しんだ男子生徒が命を絶ちました。遺書には、いじめた人たちの名前が書き残されていました。その中に、同じ塾に通っていた僕の友だちの名前もありました。

あれから彼に会う機会は減りました。ただ彼は、亡くなった子がいじめられている場面において、周りでちゃかしたり、笑ったりしたことはあったけれども、自分が直接いじめていたとは、考えていなかったと言っていました。

でも亡くなった子は、けっしてそう受け止めてはいなかったのです。

僕は、自分が嫌だと感じるようなことは人にもしたくないと思っています。当たり前のことと感ずるかもしれないですが、もういちど、そのことを考えてみてください。

おたがいの気持ちをわかろうとしなければ、みんなが楽しく笑うことはできません。



(朝日新聞 2006年12月8日掲載)

3 代表研究授業（学級活動）

(1) 1年6組「より良い中学校紹介新聞を作成するためにお互いにアドバイスしよう」

(2) 単元の指導計画（全7時間）

時	学習のねらい（◆）と主な活動内容（○）
1	◆新聞を作成するねらいを知ろう ○テーマの決定（8つのテーマを分担）の仕方についての説明を聞く。 ○良い新聞とはどのような新聞なのかを知る。
2 3	◆新聞を作成しよう①② ○新聞の内容を決定する。 ○記事の分担をする。 ○構成を考えて、新聞の下書きを完成させる。
4	◆より良い新聞を作成するためにお互いにアドバイスをしよう ○お互いの下書きの新聞をみてアドバイスをする。 ○アドバイスをもとに、改善点を確認する。
5	◆アドバイスをもとに記事を再構築しよう ○前時のアドバイスをもとに自分の担当した記事を作り直す。 ○みんなの記事をはり合わせ新聞を完成させる。
6	◆発表の準備をしよう ○完成した新聞を利用し、発表の練習をする。
7	◆小学生に中学校について分かりやすく発表しよう ○小学生に、中学校について作成した新聞を利用して、グループごとに発表する。

(3) 本時の計画

①本時のねらい

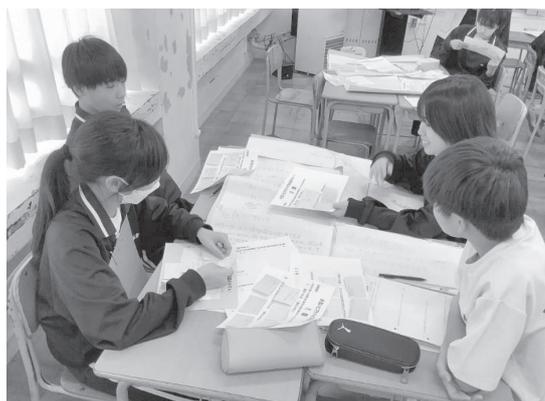
小学生のための中学校生活紹介新聞について良い新聞づくりの条件を基に、互いの記事に適切な助言をしあうことを通して、さらに良い新聞をつくるための改善をまとめることができる。

②新聞活用の意図と目指す生徒の姿

事前に、新潟日報の方から講演会をしていただき、「相手に伝える方法。文書にまとめる力。」について学習を深めた。その指導をもとに「見出し」「リード文」「切り口」を意識した構成で模造紙一枚に中学校紹介をまとめる。その学習を通して新1年生が知りたいと思うことを分かりやすくまとめ、発表する力、伝える力を身に付けさせたい。今回の新聞づくりを通して、行事や、諸活動を振り返り、意見を交わし、協力し新聞を作成して、出身小学校を意識せず、五十嵐中学校の生徒の一員として再確認し、新たな人間関係の構築を図っていききたい。また、進級への心の準備、先輩になるという自覚を徐々に持たせていきたい。

(4)授業の実際と新聞発表

授業の最初に新潟日報の木村様から講演していただいた内容を思い出し、「良い新聞の条件」を再度確認した。学習課題「より良い新聞を作成するためにどのようなアドバイスができるだろうか」と設定し、自分たちが作成した新聞をより良いものにする活動を行った。各班の新聞をローテーションを行いながら読み合い、感じたことやアドバイスを付箋に書き、アドバイスシートを完成させるよう生徒は意欲的に活動した。生徒は、これまで「良い新聞の条件」を毎時間徹底していたため、条件に沿ったアドバイスができていた。他の生徒からもらったアドバイスを自分の新聞に生かそうとする姿勢が見られ、意欲的に活動していた。他の班からのアドバイスシートをみて、今後の改善点を確認し、プリントにまとめていた。協議会では、「読み手を意識した生徒が多くいて良かった。」「『良い新聞の条件』を提示してあったので、思考のポイントが分かりやすかった。」「自分たちが作成した以外の新聞に触れることで新しく取り入れたいポイントを見つけていた。」という意見が上がった。生徒はこの授業の後に各グループで新聞を練り直し、ブラッシュアップした新聞を作成し、12月5日の小中交流会に臨んだ。小中交流会では、小学6年生を中学校に招き、中学校生活の様子などを新聞として伝える活動をした。小学6年生は真剣に中学生の新聞の内容に耳を傾け来年度入学に期待を寄せていた。



代表研究授業（総合的な学習の時間）

(1) 2年1組 「地域創成プロジェクト～修学旅行～」

(2) 単元の指導計画（全24時間）

時	学習のねらい（◆）と主な活動内容（○）
1	◆オリエンテーションを通して、修学旅行の概要を知り、関心を高めることができる。 ○旅行者から修学旅行の日程や行き先の概要を聞く。
2	◆調べ学習を通して京都の歴史や伝統、文化などを知り、多くの観光客が訪れる魅力的な都市であることを理解することができる。 ○ICT端末を用いて調べ学習をする。
3	◆班別自主研修で訪れる京都市がどのような視点で街づくりをしているのかを考えることができる。 ○観光客が多い京都市のオーバーツーリズムの現状や解決策を学習する。 ○京都市の街づくりの視点について考える。
4～9	◆前時までの学習を生かして各グループでテーマを決め、班別自主研修の行き先を決めることができる。 ○班でテーマを決める。 ○班別自主研修の行き先を調べ、プレゼンテーションや話し合いで決める。
10～24	◆修学旅行に向けての準備を進めることができる。 ○クラス別研修の行き先を調べ、話し合って決める。 ○修学旅行実行委員会を中心に、きまりやしおりの作成など、事前準備を行う。

(3) 本時の計画

①本時のねらい

京都市が、観光客と市民の両方が満足する持続可能な街づくりを目指していることを、オーバーツーリズムの解決策をタブレットで調べたり、新聞記事を読み取ることを通して考えたりすることができる。

②題材として使用する新聞記事

- ・「京都市 体験や意見教えて」京都新聞 2024年4月12日朝刊掲載
- ・「東山方面500円特急バス」京都新聞 2024年2月21日朝刊掲載
- ・「京都市への観光回復、住民どう思う」京都新聞 2024年3月28日朝刊掲載

③新聞活用の意図と目指す生徒の姿

新聞活用の意図としては、新聞記事①は問題意識や意欲の喚起、新聞記事②は京都市が行っている実際の対策の一例を知らせるために、新聞記事③は京都市がオーバーツーリズムの問題を解決するための視点のヒントとして、まとめの時間に活用したい。地元京都の新聞記事を用いることで、ネットでは得られにくい社会とのつながりを感じさせ、積極的に社会に参画しようとする気持ちや態度を養っていきたい。



(4) 授業の実際

今年2月に修学旅行で訪れる京都が「どのような視点で街づくりをしているか」について京都新聞の記事を活用し授業を行った。京都市は寺や神社などが多く、魅力的な観光地であるが、近年観光客の増加による騒音、マナーの悪さ交通渋滞などのオーバーツーリズムが問題になっているところに新聞を活用して生徒に注目させた。これまでの総合の時間で京都市の魅力を理解した上で、記事からオーバーツーリズムの現状を学んだ。班に分かれ、記事から「観光客向けのバス」「市民と観光客の分離」など混雑緩和策を紙に書きだした。マナー違反やごみ問題への対応も知るためにタブレット端末で京都市内のホームページなどで調べ学習をした。協議会では、「新聞は記事がしっかりとまとまっている。ネットとは違い、偏った感情が入っていない。新聞は、生徒たちに考える余地を与えてくれてとても有効であった。」「資料新聞の読み取りに一生懸命に取り組み、同じ新聞記事からも見方・感じ方の違いが感じられて良かった。」「新聞記事・タブレットの検索機能を通し、学習者が理解でき、気づけていたのでねらいを達成することができ、期待していた答えを引き出せたところが良かった。」と意見が上がった。今の2年生は、1年時から「地域創成プロジェクト（新潟市巡見）」や「職業調べ・体験」を通して、仲間と協力しながら探究的な学習を意欲的に行ってきている。生徒たちは修学旅行を心待ちにしており、京都の魅力についても社会科や前時で学んでいる。本日の授業を通して、現在の京都の実際の状況を知ること



で、より京都についての関心が高まり修学旅行で訪れる際の視点の1つになった。

代表研究授業（国語）

(1) 3年7組 「誰かの代わりに」

(2) 単元の指導計画（全6時間）

時	学習のねらい（◆）と主な活動内容（○）
1	◆教科書本文を通読し、概要を把握することができる。 ○デジタル教科書の範読を聞き、わからない漢字や語句をチェックする。 ○大まかな内容をまとめる。
2	◆抽象的な概念を表す語の文脈上の意味を理解し、筆者の考えを読み取れる。 ○「自立」「独立」「依存」「支え合い」といった言葉の本文中での意味を、解説を聞いたり、仲間と協議したりしながら読み取る。
3 4	◆課題作文の論題について、自分の考えをまとめ、表現することができる。 ○教科書本文の内容を最後まで読み取る。 ○指示に従って、適切な構成で自分の考えを作文する。 ○自論に説得力を持たせるためには、①後押しする同意見を用いる、②対立する意見の矛盾や論理の破綻を指摘する、方法があることを学ぶ。

5	<p>◆ 作文の内容を支える新聞記事を探して、考えを深化することができる。</p> <p>○ 近い内容の作文を書いている仲間と交流しながら、より自分の考えを支えてくれる新聞記事を探す。</p> <p>○ 新潟日報データベースで、自論に説得力を持たせるような新聞記事を探す。</p>
6	<p>◆ 自分とは異なる視点で書かれた作文を読み、考えの幅を広げる。</p> <p>○ 前時に探した新聞記事を参考にして、必要に応じて作文を修正する。</p> <p>○ 仲間の書いた作文と新聞記事を読み、自分の考えとの比較をしながら考え方や視野を広げる。</p>

(3) 本時の計画

① 本時のねらい

課題作文の論題「自分は社会の一員としてどのように生きるか。」について、自論を後押しして説得力を持たせられる内容の新聞記事を探し、多様な他者との対話を通して自身の考えを深化させる。

② 新聞活用の意図と目指す生徒の姿

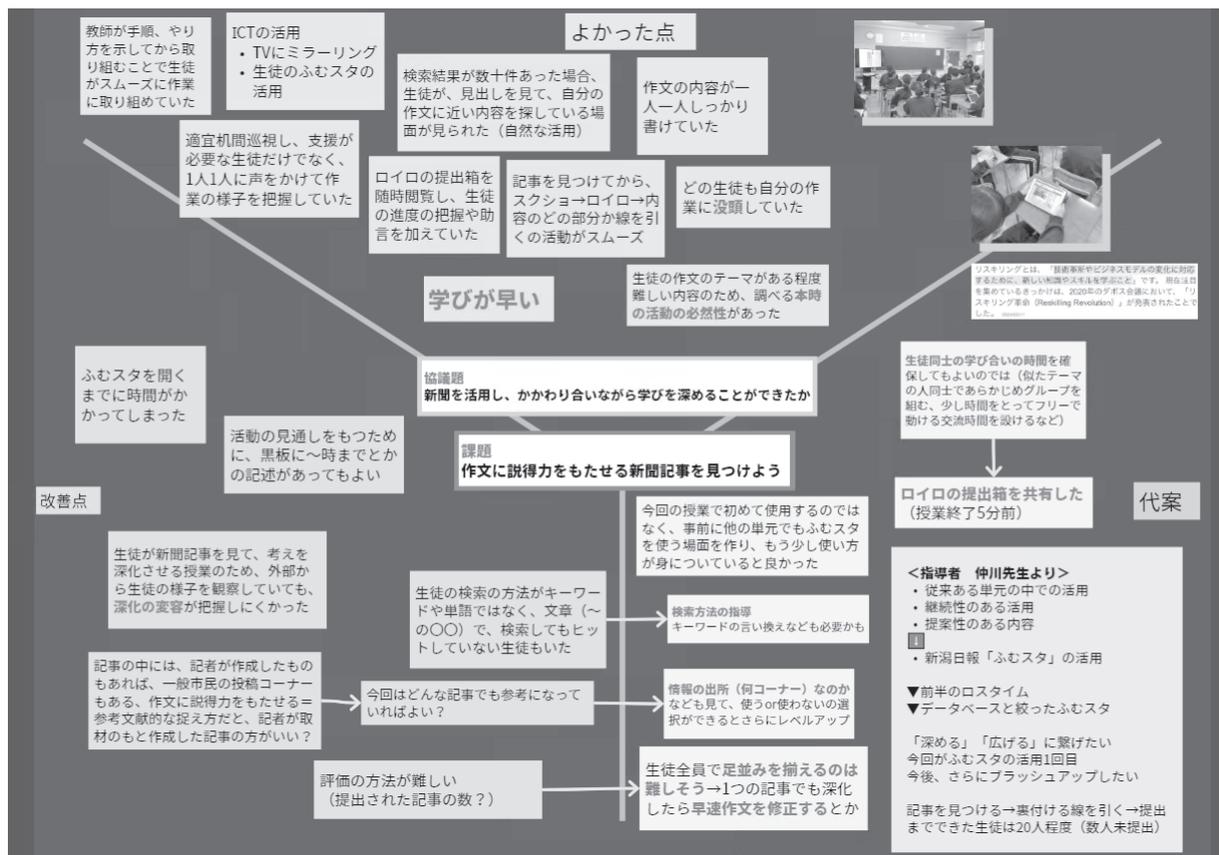
本実践では、新聞を用いて、多様な他者との対話によって、自身の考えを深め、広げること目標とする。新聞には、年代、年齢、居住地域、社会的立場が様々な人たちの考えが掲載されている。普段の生活では決してかかわることができない人たちとかかわりを持てることが、新聞の大きな魅力である。それらを有効に活用し、教室の中だけでは関わるできないような人たちとの対話を行い、生徒の学びを深め、広げていきたい。合わせて、「言葉による見方・考え方」という側面からも新聞活用の意義を検討したい。新聞は精選された言葉によって書かれた優れた文章である。そのような媒体に多く触れ、論題について仲間や多様な他者とのコミュニケーションを通して自身の考えを広げ、深め、創造的・論理的に文章表現することで、生徒の学びを質の高いものにしたい。また、授業における新聞活用を持続可能にするため、意見文や論説文を書く活動において、同様の実践が行えるようにしたい。説明的文章の学習に常に作文を位置づけ、その補強に新聞を活用することで、持続可能で効果的な新聞活用の可能性を探っていく。

(4) 授業の実際

前時に確認した説得力を出すための方策（同じ意見で後押しする方法、対立意見を否定する方法）を確認し、作文と新聞記事を例示して、本時の学習「作文に説得力を持たせる新聞記事を見つけよう」として授業を展開した。新潟日報データベースは、当日不具合により使用できなかったため、生徒は、一人一台端末の iPad のアプリ「ふむふむスタディ」で自分の意見を後押しする記事や対立意見を検索した。それぞれの意見のキーワードになる言葉を考え、検索を



かけていく。検索をかけて記事を見つける活動に慣れていなかったため、最初は、なかなか見つけられない生徒もいたが、キーワードを絞ったりして徐々に見つけられていた。検索が得意な生徒は、記事を2つ3つ探して自分の意見の補強に努めていた。また、新聞記事の中でも特に必要な箇所は、iPad上で赤線を引くなどして強調したい部分をわかりやすいように工夫していた。協議会では、「検索結果が数十件あった場合、生徒が見出しを見て、自分の作文に近い内容を探している場面が見られた（自然な活用）」、「生徒がデータの新聞記事に大切ところや自分の意見を補強してくれる内容の文章に線を引きながら進めていてポイントを明確にできていて良かった。」という意見が上がった。（以下に協議会の意見の一部を載せる。）



4 おわりに

今年度は、3教科でNIE 研究発表会を行うことを前提に研究を進めてきた。昨年度のNIEの環境を整えることを継続するとともに、各学年や各学級で新聞を活用した取組が自然と進められた。教員が自ら新聞活用の意義を考え生徒に力を付けさせようとする意識がこの2年間で高まってきたと感じられる。新聞を身近に感じることで新聞に対する抵抗感も薄まってきている。当校では、NIEのテーマとして「授業等で積極的に新聞を活用し、多様な見方考え方を養う。図書教育部と連携し、新聞を閲覧する環境を整え、新聞を通して世の中の出来事を把握する習慣を養う。」という目標を掲げて活動を行ってきたが、研究授業や各学年、委員会の取組で達成できたと感じる。生徒も教員も新聞活用の継続ことこそがNIEを有効に進める手立てであると特に感じられた。今後も、物事を客観的に思考・判断する能力、読解力、観察力、表現力を育て社会の機能や仕組みを理解する手立ての1つとして新聞を活用していきたい。（内山 雄太郎）

担当 NIE アドバイザー及び担当新聞・通信社からの一言

1 担当 NIE アドバイザー 新潟大学附属新潟中学校 校長 山本 達也



自分たちが参加する修学旅行。行き先は決まっている。しかしながら、その行き先がどういうところなのか、よく分からない。でも、まあ、取り敢えず行ってこよう。このような意識でも、修学旅行に行ってくることはできる。ただ、そこに「学び」はあるのだろうか（「修学」はできるのか）。

今回の研究会で、新潟市立五十嵐中学校の2年生は、修学旅行先である京都市におけるオーバーツーリズム問題について、京都新聞社の新聞記事を基に考える授業に取り組んだ。この授業のすばらしいところは、多々あったが、とりわけ上記のように、修学旅行先である京都市の課題を取り上げて自我関与を促すとともに、生徒の興味・関心を高める、知識や情報を獲得させる、調査や課題解決のための材料に活用するなど、意図的に新聞記事を授業に取り入れていたことが水際だっていた。そして、授業者と生徒たちとの信頼関係が実感できる授業公開だった。きっと、学びの大きい修学旅行になったことだろう。

2 担当新聞・通信社 朝日新聞社新潟総局長 佐藤 久恵



新潟市立五十嵐中学校の3つの授業のうち、主に2年1組の修学旅行をテーマにした授業に参加させていただきました。実際に自分たちが訪れる京都を取り上げることは、学びが自分事になり、いいアイデアだと思いました。京都の歴史や文化だけではなく、まちが抱える課題について知り、そこに住む人たちの暮らしに思いをはせる経験は、視野を広げ、心を揺さぶる時間になったと思います。学校で学ぶことの多くは、実は私たちの生活と地続きで、この先に広がる世界には知らないことが多く、それを知ることの楽しさを少しでも感じてもらう手段として新聞が役に立つのであれば、幸いなことだと思いました。

子どもたちの新聞への抵抗をなくすため図書館前に置いたり、ランチ時に記事を紹介したりという工夫をうかがいながら、本来なら中学生にも分かりやすい記事を届けるべきなのだ和我が身を振り返りました。とてもいい時間をありがとうございました。